

されてしまったことがある、またかつて汗の子が生れて巫者はその命長く立派な君主になるのを卜したにも拘はらず、暫くして死んでしまったので、母なる人が悲嘆のあまり巫を責めたことがあつた、巫者はこれをもまた呪ひの爲めだとして早速に呪つた人を指名して殺してしまつたこともある、甚だしきに、至つては、氣候の順を失して寒暖その節に合はないことがあるときには、これを人の所爲に歸して罪を定めて或人に負はしめる、そうしてこんな犠牲に擧げられる人はもとより彼等と反目して居る人々に限るので、彼等に悪まれるのは即ち自滅を招く様なものである、支那宮廷の内部に宦官の勢力を注意せねばならぬならば、蒙古の社會の裡面には巫人の勢力の潜んで居つたことを能く承知せねばならぬと思ふ、そうして蒙古のかゝる勢力の出現は、その信仰状態に根據を有するや勿論である。

なほく、巫人の占卜の方法等について東西古今を比較して敘述して見たいと思ふけれどもあまりくだくしいからこれで止める、荒漠無邊の境に水草を逐ふて、朝に暉々たる旭光に接し夕に燦たる星を仰ぎ、雷電風雨に膽をひやした蠻民の間には上述の如き光景があらはれた、もとよりけふの蒙古のことではない、成吉思汗の前後數代に互る間の風俗習慣の一部である、今の有様は旅行家の記録にくわしくかいてある、こゝに譯出する限りではない、これらの書に就いて古今の變遷を知り新しき文化輸入の有様と、舊新兩者の融合の有様を見、更に一方他の文化と比較研究して類似を求め、反對を見出し、文化の傳播、人種の系統、土地と人文との關係等を見るならば有益な研究をすることが出来ると思ふ